

## テヤルの史的変遷

### The Historical Change of the subsidiary verb “- teyaru -”

豊田 圭子

TOYODA, Keiko

#### 1. はじめに

テヤルには、話し手の対象（相手）への恩恵を表わすとされる用法がある。先行研究としては豊田 圭子（1974）、グループ・ジャマシイ（1998）、高橋太郎（2005）、日本語記述文法研究会（2009）などが挙げられる。現代語の先行研究では、テヤルの用法は行為の相手が必要な場合と、そうでない場合に分けられている。前者は行為の影響を受ける相手に対して、恩恵を表わす場合と非恩恵を表わす場合にさらに分けられる。高橋（2005）では、「とちめてやれ」などの場合、「とちめる」動作は相手にとって不利益になることから、相手に不利益、非恩恵を表わすものであるとする。後者の行為の相手が必要ではない場合には、話し手の決意を示すものがあり、「合格してやる」「偉くなってやる」などが挙げられている。また、グループ・ジャマシイ（1998）では「死んでやる」などは、「怒りの表現として、相手の嫌がることをするという意味で使われることもある」ものとして扱っている。日本語記述文法研究会（2009）ではテヤルの「非恩恵」について、「必ずしも有益でない恩恵の授受を表すことがある」とし、「非恩恵的な「てやる」には非恩恵的な影響を与える相手が想定できる用法と、そのような影響を与える相手が想定されない用法とがある。」とする。

先行研究から、現代語の補助動詞テヤルの用法は、以下の4つに分けられることになる。

#### 一. 相手の利益になる行動をする（恩恵・サービス）

例 東京の弟に、今年もふるさとの名物を送ってやった。（グループ・ジャマシイ1998より）

#### 二. 相手の不利益になる行動をする（非恩恵・マイナスのサービス）

例 けしからん やつだ. とちめて やれ.（高橋2005より）

#### 三. 話し手の決意を表わす

例 いつか偉くなってやる！（日本語記述文法研究会2009より）

#### 四. 話し手の決意を表わす（怒りの表現）

例 A：あんたなんか死ねばいいのよ。

B：そんなに言うんなら、ほんとに死んでやる。（グループ・ジャマシイ1998より）

現代語の研究は以上のとおりであるが、歴史的な変遷をみた研究もある。小島聡子（2002）では、上代から中世までのテヤルの変遷について記述されている。テヤルは、中古では補助動詞化しているものではなく、室町時代にはテ型の補助動詞として用いられているとする。また、荻野千砂子（2007）

(2008) では、近世前期におけるテヤルは、動作主の意志を表す用法を基本として発達し、さらに、動作主が立場上、上位者である場合が多く、上位者から下位者への意志を明確化する働きであったとする。よって、テヤル文の本質は「動作主の意志を表わす」であり、テヤル文の二次的な性質として「受け手恩恵有」と「受け手恩恵無」をあげている。

上述のテヤルの意味用法や、本動詞との関わりについて、まだ考察する余地がある。恩恵を表わすとされるテヤルや話し手の決意を表わすテヤルがいつ頃に出現したのか、また、テヤルの歴史の変遷と意味用法について、以下の3点を中心に考察し、明らかにする。

1. テヤルの歴史の変遷過程
2. 補助動詞としての用法が生じた時期と用法の変化
3. 本動詞ヤルとの関わり

本稿では、まず動詞+テヤルの意味用法について、補助動詞の動詞+テヤルを以下の2つに分ける。

動詞+テヤル	{	ヤル（移動）の意味があるもの…テヤルの移動用法 「主体の思い通りに物事を進める」意のもの…テヤルの物事進行用法
--------	---	--

また、これを見分ける方法として、以下の3点から考察する。動詞+テヤルをVテヤルと表わす。Vは前項動詞と呼ぶことにする。

1. 前項動詞とテヤルが同じ目的語をとるか。

テヤルは下記の文型をとる。したがって、前項動詞の目的語であるAをヤルも目的語とし、AのBへの移動を表すものを本動詞の用法と考える。

A（人・事物）ヲ B（場所・方向・目的地・相手）ニ／ヘ Vテヤル

2. ヤルの目的語になるもの（A）が移動するか。

本動詞ヤルは中世前期までは目的語に当てはまるものの移動を表すため、Aが移動するものであれば本動詞の意味を保持した「移動用法」と考える。

3. 前項動詞とヤルに継起的関係があるか。

前項動詞の動作後にテヤルの動作が行われる場合、本動詞の意味を保持した「移動用法」と考える。

## 2. 古代におけるテヤル

以上の点から、古代の用例を検討してみる。すると、その意味は「(物を) 送る」や「(人を) 送り出す・行かせる」であり、「移動用法」であることがわかる。(小島2002も同様)

(1) …はしきよし 妻の命の 衣手の 別れし時よ ぬばたまの 夜床片去り 朝寝髪 搔きも梳らず 出でて来し 月日数みつつ 嘆くらむ 心なぐさに ほととぎす 来鳴く五月の あやめぐさ 花橘に 貫き交じへ 縵にせよと 包みて遣らむ (万葉集18・4101)

(1) は前項動詞で「花橘を包む」ことを表わし、ヤルで「花橘を恋人へヤル」ことを表わす。前項

動詞でAに対する動作、ヤルでAヲBへ移動させることを表わす。

中古は『古今和歌集』（1例）『伊勢物語』（16例）『落窪物語』（13例）『宇津保物語』（6例）『大和物語』（15例）『枕草子』（9例）『堤中納言物語』（1例）を調査した。中古においてもVテヤルは見られるものの、依然として移動用法であり、「送る・行かせる」意を表わすようである。

(2) 良少将、太刀の緒にすべき葦をもとめければ、監の命婦なむ、「わがもとにあり」といひて久しくいだしざりければ、

あだ人の頼めわたりしそめかはの色の深さを見でややみなむ

といへりければ、監の命婦、めでくつがへりて、もとめてやりけり。 (大和物語 染革の色)

(2) は監の命婦から「革」(A)を良少将(B)へ送る・届けるという本動詞の用法である。『万葉集』の例と同じように(2)「革をもとめる」「革を良少将へヤル」のように前項動詞でAへの動作を表わし、ヤルはAを方向・相手であるBへ移動することを表わす。

(3) 老いたまへるほどよりは、爪弾をいと力々しうしたまひて、「いといふかひなきことをもしたるかな。かくて居れば、皆人は子の数と知りたるに、六位といへど蔵人にだにあらず、地の帯刀の歳二十ばかり、たけは一寸ばかりなり。かかることはし出づべしや。さるべき受領あらば、〈知らず顔にて、くれてやらむ〉としつるものを」 (落窪物語 卷之一)

(3) の「くれてやる」は、落窪の姫の父である中納言が、受領に落窪の姫を嫁がせようと考えていた場面で用いられている。クレルの意味は「一般に、人または動植物に物を与える。受け手の身分や地位が与え手より低い場合、または、話者が受け手を軽蔑している場合に用いることが多い。 (『日本国語大辞典』第二版)」である。また、古川俊雄(1995)でも、「平安時代の「くる」は(動物なども含め身分の低い者に)物を与える意を表わすものであった」とされる。(3)のクレルも、中納言(身分的に上)から受領(身分的に下)へ落窪の姫が与えられることを表わす。中納言のところから受領のところへ対象である落窪の姫が移動すること、ほかの例と同様に、「落窪の姫をくれる」「落窪の姫を受領へヤル」というように前項動詞がAへの動作を表わし、ヤルはAの相手への移動を表わすことから移動用法と考えてよいと思われる。

中古の例も、Vテヤルは、前項動詞でAへの動作、ヤルはAのBへの移動を示す用法であることがわかる。

中世前期の資料として『建礼門院右京大夫集』（1例）『沙石集』（2例）『宇治拾遺物語』（10例）を調査した。用例は13例ある。以下のような例が見られる。

(4) 右馬允、塗籠の外に居て、妻に云ひけるは、「や、女房、客人の来るべき事あり。酒肴たづねばや」とて、用途無かりければ、大口を脱ぎてやりける。 (沙石集 卷第七)

(4) では「大口を脱ぐ」「大口を妻にヤル」のように前項動詞でAへの動作を表わし、ヤルでAが

右馬允から妻へ移動することを表わす。「脱ぐ」とヤルに継起的関係があることから、移動用法であることがわかる。

- (5) 「事もおろかなり。いづくぞ、その玉持ちたりつらん者は」といへば、「かしこに居たり」といふを、呼び取りてやりて、玉の主のもとに率<sup>ヒ</sup>て行きて、「これはしかじかして、その程に落したりし玉なり」といへば、えあらがはで、「その程に見つけたる玉なりけり」とぞいひける。

(宇治拾遺物語 卷第十四)

(5) は、「呼び取る」の対象が不明瞭のため、二つの解釈ができる。①遊女を呼び取りて、遊女をやる、②玉を売っていた人物を呼び取り、遊女を、玉を売っていた人物のもとへやる、というものである。いずれにせよ、移動用法であることがわかる。なお、新日本古典文学大系(底本:陽明文庫蔵本)では、「[かしこにゐたり]といふをよびとりて、やがて玉の主のもとに率て行て」とあり、脚注(p361:26)に「諸本「やりて」。底本も判読しにくい。」と記されている。

次に、中世後期の資料として、抄物資料『史記抄』(8例)『毛詩抄』(13例)『玉塵抄』(5例)を見てみよう。

- (6) 是故爲<sup>フサムル</sup>水<sub>ヲ</sub>者——

疏決シテ水ノイクカタヲヨクミチヒイテヤルソ。(史記抄 周本紀1477)

(6) は「水を導く」「水をヤル」となる。本動詞ヤルには「流れて行くようにする」(『日本国語大辞典』第二版)という意味があるので、(6) のヤルは本動詞であると思われる。また、このヤルは方向や到着点を示す二格、へ格の補語をとらない。『史記抄』に見られるテヤルは、まだヤルの「Aをどこかへ移動させる」意が強く、移動用法であると考えてよい。

- (7) 日本ではユリワカ大臣のカワれた鷹に書<sup>クカ</sup>や硯<sup>シヨ</sup>などを云<sup>スリ</sup>((結))付<sup>ユイ</sup>てヤラれたれば海<sup>ウミ</sup>で遠路<sup>エンロ</sup>にクタビレ<sup>テ</sup>海<sup>ウミ</sup>えヲチて死<sup>シ</sup>だを高尾<sup>タカオ</sup>に堂<sup>ドウ</sup>アリソ (玉塵抄)

(7) は、前項動詞「結いつける」でAへの動作を表わす。「鷹に書・硯を結いつける」「鷹をBへヤル」となり、Aが異なる。「結いつける」とヤルには継起的関係があることから、移動用法である。

以上のように、中世後期までにみられるテヤルは、ほとんどが本動詞として用いられていることがわかる。しかし、(7) のように、前項動詞とヤルではAが異なるなどの補語のとりかたに変化がみられる。

## 5. 補助動詞テヤルの成立と展開

### 5.1 Iの用法

室町後期には、次のような例が出現する。

- (8) 文王嘉止。大邦有子。大邦有子。倪天之妹。文定厥祥。親迎于渭。造舟為梁。不顯其光。  
文定一毛鄭かわつたぞ。毛は大姒が文徳がある人ぢやほどにめとらうと思てう<sup>ト</sup>らをしたれば、うらが吉祥なほどに、さらばとて后妃にうらにまかせて定られたぞ。(略)注、問名はそなたの御

名はなにと云ぞと問が六礼の一ぞ。納采、納吉、納徴、問名、請期、親迎が六礼ぞ。前の注に問名がある、こゝは納吉ぞ。あちへう<sup>ト</sup>らかたもよ<sup>兆</sup>いと云<sup>イッ</sup>てやるぞ。 (毛詩抄 卷第十六)

(8) は「うらかたもよい (= 占いの結果) と云う」「うらかたもよいとあちへヤル」となる。占いの結果を相手へ移動させると考えられる。「あち」という方向も示される。Aがものの名詞ではなく台詞の引用となっていることは前代には見られないことである。

(9) その後エソポ諸国へ渡り、道を説き教ゆれば、バビロニヤといふ大国のリセロと申す帝王、このエソポを寵愛あって、忝なくも御身近う召し置かせられた。その比諸国の帝王より互に不審の勅札を送り、その不審を開かねば、あるほどの宝を奉らるる<sup>かたき</sup>形儀がござった。しかれば、バビロニヤへ諸国から掛くる不審をば、エソポが智略をもってたやすう開いてやり、バビロニヤから掛けらるる不審をば、他国から開くことが稀にあったと聞えた。

(エソポのハブラス エソポが生涯の物語1593)

(9) は、「不審を開く」「不審を諸国へヤル」となり、「開く」はAへの動作を表わし、ヤルはA (不審を開いた結果) をB (諸国) へ移動することを表わす。「開く」とヤルに継起的関係があることから、本動詞の意味を保持した移動用法と考えてよいだろう。

中世前期までの例では、本動詞のヤルの補語は物・人・文 (歌) などであり、物理的なものであった。それに対し、(8) (9) はそれぞれ「占いの結果」「不審を開いた結果」という物理的ではない名詞を補語にとっている。本動詞ヤルの変遷においても、中世後期の用例にはヲ格名詞が物理的なものではなく抽象的な名詞が当てはまる例が出現する。抽象的な名詞+ヤルが出現し、抽象的な名詞+Vテヤルも用いられるようになったと思われる。これが、テヤルが物事進行用法を獲得する第一歩であると考えられる。テヤルの具体的な移動の意味が薄まっている反映と考えられる。

近世に入ると、以下の例が出現する。

(10) (太郎冠者) 今せい<sup>(成 敗)</sup>ばひする事むごひ事なれども、身にはか<sup>(代)</sup>へられぬ所で、れう<sup>(料 簡)</sup>けんもなひ、とてもたすくる事はなるまひ、尋常に覚悟をさしめ、跡<sup>(ねんころ)</sup>を念比にとふらふてやらふぞ

(虎明本狂言 大名狂言類 ぶあく1642)

(11) むかしおろかなるものと、かしこきものと、ともに関東ゑくだるとて、旅の道づれとなりぬ。(略) かしこきものゝいひけるは、しからば今よりハ、たがひに無理をいわずして、たゞしくして道づれとなるべし、道中にて君もし銭あらば、あひともにつかふべし、われもし銭なくむば君の銭をつかわん、またゆくさきに山道あらば、のぼるときハわがこしをおして給ハれ、下る時ハまた君の肩をおしてやるべしといへば、 (理屈物語 卷之五1667)

(12) 酔<sup>るひ</sup>のまぎれに、懐までは手を入れさせ、「旅やつられでさへ、いとしらしき男」と、笠の緒のあたりしほほげたをさすり、わらんち摺<sup>ずれ きびす</sup>の踵<sup>かかと</sup>をもんでやれば、 (好色一代女 卷六1686)

(13) 女郎の方からも、「ちつと内<sup>うち</sup>にも居つきなんし」など、異見<sup>いけん</sup>をし、客の方からも、随分<sup>ずいぶん</sup>外の客<sup>ほか</sup>を

つとめさせるやうに、手をおしえてやることなぞあつて、 (傾城買四十八手 真の手1790)

(10) (11) (12) (13) のAはそれぞれ「跡」「君の肩」「踵」「手」である。これらの対象物はどこかへ移動するものではない。また、「相手が死んだ跡をとふらふ」「君の肩をおす」「男の踵をもむ」「手をおしえる」と、それぞれ「跡をヤル」「君の肩をヤル」「踵をヤル」「手をヤル」というようにヤルはAを目的語としてとらない。こういった例が多く見られることから、室町後期から補助動詞としてのテヤルが成立しはじめ、近世初めにテヤルのIの用法が成立したと言えるだろう。

Iの用法は次のようなものである。用例(10)から(13)では、前項動詞で動作すること、その動作が相手に及ぶことがテヤルで示されている。動作が直接に及ぶ相手が必要になる。「(死んだ跡をとふらふ)」「(君の肩を)おす」「(男の踵を)もむ」「(手をおしえる)動作は、相手がいないと成り立たない動作である。

Iの用法のそれぞれの人物の関係と動作の方向は(10)が太郎冠者から武悪へ、(11)がかしこきものからおろかなるものへ(旅の道連れ)、(12)は客引きから客へ、(13)は客から女郎へ、である。社会的地位は同等(10、11)か、あるいは上下関係(12、13)があると思われる。Vテヤルは、物事の進行を優位に進められる者から、それに従うしかない者へその動作が及ぶ場面で用いられるという共通点がある。

Iの用法で用いられる前項動詞は以下のとおり。

〈表1〉 Iの用法 前項動詞一覧

動詞の自他/時代	他動詞	自動詞(意志的)	自動詞(無意志的)
中世後期	(不審を)開く		
近世前期	(死んだ跡を)とふらふ、たすける、おしへる、才覚する、着せる、(引敷を)付ける、おいこす、(しびれを)なおす、(名を)変える、(名を)付ける、乗せる、仲人する、ありつける、(踵を)もむ、(客を)泊り留める、買う、(髪を)なでつける、(衣装を)くける、(肩を)おす、ゆるす、算用する、(脇指を)しかける、(棚を)釣る、(人の頭を)そる		
近世中期	(青柳(人名))かわいがる、(来いと)言う、(返り筆を)したためる、(気のおおるよふに)異見をする、(伯母に)逢わせる、(花がん袋を)こしらえる、(すま(人名)を)安堵させる、(与兵衛を)助ける、(遊女の抱えを)する、(酒を)つく、(手を)教える、(兄弟ぶんを)取り持つ、(かわいい男にいきな形をさせて)呼ぶ、かす、(草を)とりかえる、(名を)付ける、(此子の)廻向する、(烏帽子、宝冠など)着せる、(点を)かける、(値段を)まける、(死んだ跡を)懇ろする	(五六度も)来る、しやれる(洒落たことを)言つて女郎を喜ばせる、(客に)成る	(地獄へ)落ちる
近世後期	(着物を)しぼる、(願を)かなえる、(お床・寝まき・箱のふた・金を)出す、(女性を)送る、(着物を着るの・女性を送るのを)手伝う、(人・餓鬼・女房・女性を)かわいがる、(大福餅・お菓子・醤油・猪・鯛を)買う、借りる、世話をする、(馬士を)おろす、(弥次郎を)堪忍する、慰む、(櫛を)暖めておく、(金を)讀談する、(お代を)払う、(北八を)了簡する、(着物を)つまみ洗ひする、(貧乏な奴を)救う、(水を)汲む、(石塔を)建てる、(食べ物を)分ける、(前を)見せる、(妹を)ふびんがる、(結った髪を)緩くする、(北八を)つかまえている、(弥次郎を)いなす(「帰す」の上方語)、(北八に着物を)くれる、(合羽・道具・手拭・糠袋を)貸す、(なんでも)届ける、(世事だから・子どもを)褒める、(番頭を)ゆるす、(酒を)つく、(なんでも言うことを)聞く、(たばこの火を)借りる、(たばこを)つける、(小袖を)かける、(目を)かける、(犬を)呼ぶ、(金を)放り出す、(縄を)とく、(金を)払う、(親の貧苦を)貢ぐ(助ける)、(相手に)貢ぐ、(女房を)助ける、(顔などを)拭く、(櫛を)挿す、(宅悦を)帰す、(拾った物を)返す、(値段を)まける、(口の中・手・顔を)洗う、(あの子を)いたわる、(女性のおんまを)もむ、(文の手本を)書く、(仇を)討たす、(仇を)討つ、持たせる、(鯉を川の中へ)逃がす、(売り上げを)見せる、(値段を)まける、(能事・叱言)いう、(浄瑠璃を)かたらせる、(魔除けを)してもらう、(越後節の真面目・道・役者・棧敷を)教える、(穴を)あける、(着物を)替える、(菓子を)取り分ける、(背中を)流す、(鍾(かね)を入れる、(肥取りに)小便する、(菰を)持つてくる、(蚊を)追う、(褒美に)弁当にする、(銭右衛門を)居候に)置く、(為になること・世話)する、(寝まきをとる、(坊主を)寝させる、(生酔を表へ)出す、(舞茸を)買う、(障子を)張る、(真砂を紙に)のせる、(枕を)とりかえる、(ほころびを)ふさぐ、(赤子に)添乳する、(値段を五百五十に)する、(うなへ(叱ることの幼児語)を)する、(糠焼を)持つて行く、(湯を水で)うる、(背中を)引つこする、(竹が欲くば)所望する	(駕籠に)乗る、(女の親のところ・先・焼場へ)行く、(現場へ)でかける、(酒手を二百)増す、居る、(名付け親に)なる、(おれが)居る	

<p>近代以降</p>	<p>(お政さんを病院に・取除者を仲間に・酒を口へ) 入れる。逢わせる。(着物・金・旅費を) 拵える。しまっておく。(子どもを) 帰す。(ご飯を) よそう。(犬の死骸を) 埋める。(長良の話を) 聞かせる。(人) を送る。(学) を取り押さえる。(清の身の上を) 案じる。(診察のこと・富岡の自殺を) 知らせる。(背) を叩く。(世話を) する。(念仏・万歳を) 唱える。(女の子を) 面倒みる。(姉を) 堪忍する。(金・借金・鞠を) 返す。(背中を) 叩く。(新聞・心の清い所を・海老と蕨の色をターナーに・二人で歩いている所を・好いもの・手拭が蛇に成るのを) 見せる。(様子を) 見に行く。(幸助を商人に) 仕立てる。(人) を奢める。(ストーブを焚いて室を) 暖かにする。(細君を) 連れて行く。(敵の動静を) 偵察する。(コロパスを) 訳す。(櫛の歯を) 入れる。(自分を) 仲間にする。どうかする。(餌) をかえる。(留任の運動を) する。(返報を) する。(先祖を) 拝ませる。(戸外の空気を) 呼吸させる様にする。(親友を) 申う。(水) を持て来る。(智能の働きを) 増す。(磯吉を) 出す。(何と) 言う。(被中炉を) 入れる。(その絵が吾輩(猫)であると云う事を) 知らず。(ホイイに料理名を) 教える。(細君の願を) 叶える。(電車に) 乗らす。(彫刻に箔を) 塗る。(金田令嬢を) 安心させる。(研究を) 仕る。(世人を) 救う。(母に) 逢わせる。(身の落付を) つける。(神経系統を大事に) しまっておく。(自分と立場を) 代わる。(行を盛に) する。(弟を物に) する。(腕を) 卸ろす。(女を) 添わず。(息子) を思い通りにさせる。談判する。(姉の夫を・画を老爺に) くれる。(小夜子を) 喚び還す。(こだわりを) 附ける。(口を) 聞く。(英語の下稽古を) する。(頭・眼や頬を) 撫でる。(蝙蝠傘を) 持っていく。(同意を) 求める。(富岡に何事かを) 尽くす。(手紙を) つける。(仇) を取る。(手足を) 洗う。(白い花を) 焼く。(えぐを手に) 載せる。(酒を口) に入れる。(菓子を) とる。(卵) を転がす。(銅貨・旅費を) 出す。(緑素を) 捲く。(鮎を) 入れる。(寒月君に様子を) 教える。(便宜を) 計る。(閉鎖を) 命じる。(着物を) 拭く。(球を) 投げる。(度胸を) 買う。(三千代を) 喜ばす。(指輪を) 買う。(留守を) 預かる。(何でも) する。(母の希望通に) する。(金を) 貢ぐ。(お金を) 儲けさせる。(敵を) 打つ。(具体的な証拠を) 示す。(変な字・茶を) 送る。(寸燵を) 貸す。(反応を) 観察する。(誤解を) 正す。(迷惑を) 省く。(筋道) を話す。(相手・先方の心を) 慰める。(本の序文を) 書く。(手紙を) 渡す。(演説会の取入を) そちらへ) 廻す。(心配無用なことを) 受け合う。(端艇を) 漕ぐ。(子を) 負う。(土産を) 届ける。(職員に) 紹介する。(下宿を) 周旋する。(月給を) あげる。(生計の不足を) 補う。(哲学を) 講釈する。(女の手を) 導く。(戦の見物を) させる。(安宅餅を) 奢る</p>	<p>(傍に・動かずに) 居る。代わる。(自分が人の為に) 働く。(代わりに・葬式に) 行く。物にする。(保護者に) なる。(大きな声で) 笑う</p>
-------------	---	--

## 5.2 IIの用法

Iの用法と同時か、やや遅れて、動詞自体の意味として良い意味を表さないものにテヤルがつくものが出現する。これらは主に相手に不利益・迷惑があることを表す。

- (14) (舅) いやわごりよはなぜに身共にどろをかけた (髻) かけうとはおもはなんだれ共、か、つたらはおこらやれ (舅) こらへひとはきこえぬ、かけてよひ物ならばかけてやらう 《と云て又かくる》 (髻) 是はいかな事、身共はけがにかけたれば、そなたはわざとおかきやる、かけどくならば身ども、かけてやらふ (虎明本狂言 髻類山伏類 水掛髻1642)

(14) は、田で舅と髻が言い争いになり、泥水を掛け合う場面である。Aは「どろ」である。髻が「(泥水を) かけうとはおもはなんだれ共、か、つたらはおこらやれ」と言い、舅はそれを聞き、髻にわざと泥水をかける。さらに舅がわざとそうしたことで、髻も「身ども、かけてやらふ」と言う。

- (15) すり「都にすまる致すすつぱじや、田舎者が「宝買をふ」と言ふ、此者をぬいてやろふ、なふ  
〜 (狂言記外五十番 宝の植1700)

- (16) さるつんぼ、いたちをとらまへ、かわをはぎ、きんちやくにして人にミせんと、ほふへありきけるに、しる人にあひければ、御しんぶ、まめなかといへば、これか。これはあなからでるところをころした。いや、おやじはまめなかといふば、またでたら、ころしてやろといわれた。  
(軽口初売買 巻之五1739)

- (17) 女房はいさようで御座ります。いつでも虎の門へよりますと、永ふ御座ります。せんども、よりまして、虎の門の御客様は此方へお出なんしたのに帰りませんで、直に品川え参りまして、其朝ゆるりと帰りました。しかも、其ばんはいそがしいばんで、御座りましたのに帰りませんから、帰りますと、大きにふり付てやりんした (遊子方言 発端1764-1770)

(18) 北八「なんだ、このべらぼうめ、さつきからそうてへ気にくはねへやろうめだ。あんまりたはことつきやアがるとひきづりおろすぞ 上方「おもしろい。サアおろして見やんせ 北八「ヲ、まつさかさまに、おつことしてやろう (東海道中膝栗毛 五篇下1806)

Aはそれぞれ「此者」「いたち」「虎の門の御客様」「上方者」である。以上4例の「(此者を)ぬく」「(いたちを)ころす」「(御客を)ふり付る」「(上方者を)おつことす」という動詞は、相手に物理的に直接影響を及ぼし、動詞自体が良い意味を表さないものという特徴がある。このような用法をⅡの用法としておく。

Ⅱは、Ⅰの用法と同じく相手を必要とするものであり、「(泥を)かける」「(此者を)ぬく」「(いたちを)ころす」「(御客を)ふり付る」という動詞は動作が直接に及ぶ相手がなければ成立しない動作である。

Ⅰの用法とⅡの用法に共通するのは、相手に直接的に前項動詞の動作が及ぶということである。相違点は、Ⅱの用法は相手にとって動作が不利益になるという点である。

Ⅱの用法で用いられる前項動詞は以下のとおり。

〈表2〉 Ⅱの用法 前項動詞一覧

動詞の自他/時代	他動詞	自動詞 (意志的)
近世前期	(いいかげんなことを)教える、(泥水を)かける、言う、切る、(をくばに)のせる、をしふせる	
近世中期	恨む、(とうがらしを)くわせる、なぶる、(大きな目に)遭わせる、(乳を)食ひちぎる、(首を)切る、(はてつ腹を)刺り貫く、こまらせる、売る、ぬく(だます)、(相手を)ふり付ける	
近世後期	(ばアさんに・お師匠さんに・おめへの内へ)いいつける、(筋骨を)抜く、(こつちが相手を)だます、たき出す、(舟・北八を)じやます、(相手を)こまらせる、(女の尻を)つねる、(人を)まごつさせる、(相手を馬から)おつことす、(相手を馬から)つつき落とす、(川へはめた)意趣返しをする、ぶつちめる、(女へ錢を)ぶつつける、(店を)ひやかす、(芸者と客の男に)毒づく、しめる(とつちめる)、(男の子が盆踊りをするのを)たきめす、(請人のところへ)引きわたす、(向こうの面を)引搔むしる、(大きな目に)逢わせる、(相手の鼻を)あかす、(おまえを)一番しめる(とつちめる)	(親のところへ)鳴込む(どなりこむ)
近代以降	(土性骨を)打挫く、(盗人を)ひどい目に合わせる、(露西軍兵・金田のじいさんを)引搔く、(天下の茶器を)敲き壊す、(岩崎の塀などを)壊す、(彼の鼻柱を)挫く、(風邪を)引かせる、(死んで島田を)祟る、(阿蘇の噴火口から人を)落とす、(赤シャツと野だ・こんな働き手・商人・赤シャツを)撲ぐる、(山嵐の卑劣をあばいて)大げんかをする、(隠れている奴を引きずり出して)あやませる、(赤シャツも一所に)免職させる、(耳を)引っ張る、(米でも麦でも)奪いとる、(奴等を)打っ飛ばす、凹ませる、(あんな奴)打ぐる、(方々へ)触れ廻す、(復讐を)する、(野良猫を・蛙を棒で)叩く、(悲惨な自分を自分が・自分の心を)苛める、(悪口を散々)言う、(帰り道を)絶つ、(和尚の首と悟りとを)引替にする、(嘘を)衝く、(ロシアを)怒らす、(少女を)叱る	

### 5.3 Ⅲの用法

近世後期にはまた別の用法が生じる。(19)は『東海道中膝栗毛』の例で、期限までに金を用意しなければならぬ場面である。この「間に合わせてやる」は、弥次が自分自身の動作について意気込みを表わしている例だと思われる。

(19) a弥次「ヤア喜多八か。エ、今時分にどふして来た 北八「イヤもふへ、内に落着ておられやせぬ。此間からおめへに頼んだ十五両の金の事、翌日は店おろしにかゝるゆへ、ぜひへあすの朝まで、わつちが遣ひ込だ穴を、埋ておかねばなりやせぬ。(略)いよへそのか<sup>あす たな</sup>ねは出来やせうかね 弥次「しれた事よ。あしたの昼までには、きつと出かしてやる。

(東海道中膝栗毛 発端1814)

b弥次「おれも手めへをおもふは、身をおもふだから、其咄のとをりにいきさへすると、互の  
為だ。あすの昼時分には、耳を揃へて十五画、きつと間にあわせてやるぞ

(東海道中膝栗毛 発端1814)

(19) の「出かす」「間に合わせる」動作は相手に及ぶ動作ではなく、相手を必要としない種類のものである。これをⅢの用法とする。Ⅲは1800年代から見られる。ほかに以下の例がある。

(【 】内はト書、【 】内の／は改行を表わす。)

(20) 弥次「ヲ、サ<sup>へんぐり</sup>辺栗やの与太九郎か 北八「ソレへ、そいつが所へ<sup>たづ</sup>尋ねていつて、酒でも<sup>のん</sup>呑で  
やろふじやアねへか (東海道中膝栗毛 七篇下1808)

(21) 伸る「ヲ、いた【トとびのくひやうし、さかづきにさはり、きた八のひざ／のへ、ばつたり  
おちるとそこらぢう、酒だらけになる】(略) 北八「イヤあらはずと、よしへコリヤほんの  
<sup>ふだん</sup>不斷ぎだ 伸る「ハテ御ゑんりよはおませんわいな。おぬぎなませへ【トこの伸るどもふたり、  
きた八のきもの、これもうらに、十のじのしるし、あるか見てやらん／とおもひ、うなづきあ  
ふて、むりにふたりして、おびをときにかゝる きた八きもをつぶし】「コレサへよいといふ  
に (東海道中膝栗毛 八篇中1809)

(22) 後「へ、ン<sup>めうしゆ</sup>妙手を<sup>さす</sup>指てナ。サア<sup>にげ</sup>逃ろへ。能<sup>い</sup>かへ。逃<sup>にげ</sup>たナ。そこで<sup>なに</sup>何を<sup>うつ</sup>打てやろうな。ヤも  
う<sup>いつけんかく</sup>一間角を<sup>つつこ</sup>突込め (浮世風呂 前編卷之下1809)

「酒を呑む」「着物の裏を見る」「将棋の駒を打つ」という動作は相手が必要なものではなく、話者が一人でできる動作である。Ⅰ・Ⅱでは相手に直接及ぶ動作であったが、Ⅲでは話者一人の動作となった。

Ⅲの用法で用いられる前項動詞は以下のとおり。

〈表3〉Ⅲの用法 前項動詞一覧

動詞の自他/ 時代	他動詞
近世後期	(酒でも) 飲む、(金を) でかす、(金の準備を) 間に合わせる、(北八の着物の裏に印があるかを) 見る、(様子を) 窺う、(将棋のコマを) 打つ、(仏の言う通りに) する
近代以降	歌う、悟る、(転任の) 運動する、勉強する、勤める、(牛肉を) 食う、(誓を) とる、(どうにかして・横顔を) 見る、(勝手になさいと) 言う

#### 5.4 Ⅳの用法

1900年代になると、一般的には好ましくない、自分にとって不都合な動作にテヤルがつく用法がある。これをⅣの用法とする。

(23) 向うの云い条が尤もなら、明日にでも辞職してやる。 (坊っちゃん1906)

(24) 叱らアれて、叱られて、死んでやろかと、出て見たら、 (北原白秋詩集 思ひ出1911)

(23) (24) は、それぞれ「辞職する」「死ぬ」という動詞で、話者のみの行動である。相手を必要としないことはⅢの用法と共通している。しかし、その行動は自分に対してマイナスの行動であると

いう相違が見られる。また、1900年代以降から、無意志的な自動詞（「なる」「死ぬ」）にもテヤルがつき、無意志動詞を意志化する用法も見られるようになる。

- (25) 私には金もなく、自由もなく、解放もなかった。しかし「新しい時代」と私が言うとき、十七歳の私が、まだそれとはっきりは形を成さぬながら、一つの決意を固めていたことはたしかである。『世間の人たちが、生活と行動で悪を味わうなら、私は内界の悪に、できるだけ深く沈んでやろう』 (金閣寺1956)

Ⅳの用法で用いられる前項動詞は以下のとおり。

〈表4〉Ⅳの用法 前項動詞一覧

動詞の自他/ 時代	他動詞	自動詞（無意志的）
近代以降	辞職する	死ぬ、一擲する、（悪人に・病気に・痴漢に・下品に）なる、（内界の悪に）沈む

以上をまとめると、次のことが指摘できる。

1. 室町後期より、前項動詞とテヤルがとる目的語が異なるものが出現する。
2. 補助動詞の用法にはⅠからⅣまでそれぞれ以下の用法が認められる。
  - Ⅰ：Ⅴの動作が相手に直接に及ぶことを表わす。結果的に恩恵になる場合である。
  - Ⅱ：Ⅴの動作が相手に直接に及ぶことを表わす。結果的に非恩恵になる場合である。
  - Ⅲ：Ⅴの動作が相手に直接に影響せず、主体が一人で行う動作であり、決意表明を表わす。
  - Ⅳ：Ⅴの動作が相手に直接に影響せず、主体が一人で一般的に好ましくない動作を行うことを表わす。
3. Ⅰは中世室町後期、Ⅱは1600年代、Ⅲは1800年代、Ⅳは1900年代にそれぞれ出現する。
4. 相手が必要であるⅠ・Ⅱの用法は、社会的身分の上下というよりは、物事の進行において優位に進められるものが、それに従うしかないものに対してテヤルを用いている。

## 6. 本動詞との関わり

移動を表わすヤルは相手・場所などBが必要となるものがある。補助動詞テヤルもまた、Ⅰの用法では動作の影響が直接に及ぶ相手が必要となることから、移動を表わすヤルとの共通点がある。また、本動詞には中世後期に「主体の思い通りに物事を進める」意が生じる（豊田圭子2012）。この意味から補助動詞テヤルの意志性・視点の制約へとつながると思われる。すなわち、主体の思い通りに物事を進めることは主体の意志によるものであり、そのため、主体の視点からしか用いられない。いわゆる「中立の視点」を持たないものと考えられる。

本動詞のヤルの変遷について、豊田圭子（2012）で次のように述べた。

1. 上代から「人を行かせる」「物を送る」などの意味で用いられていた。
2. 中古にはそれ以前の意味に加え、「車を進ませる」意が出現する。

3. 中世の抄物資料には「物事を自分の思い通りにおし進める」意の例が見られる。
4. 近世になっても「進ませる」意が見られるが、1700年代になると「何かをする」意の行為を表わす用法が出現し、その後定着していくようである。
5. 近世には「問題事・芸事+ヤル」という補語の制限があったが、近代において、徐々に「身を入れて行うこと」についても言えるようになった。

さて、授受動詞の先行研究では、ヤルはもともと授与の意味まで表わしておらず、上代～中古では、ただ遠心的方向への移動を表わすものであり、授与の意味を表わすのは中世になってからとされていた。しかし、上述のように、上代には「白玉を包みて遣らば…」のように「物ヲ人へヤル」構文の場合、授受表現ととらえてよいと思われるものが見られる。中古では以下の例もある。

(26) むかし、男ありけり。人のもとよりかざりちまきおこせたりける返りごとに、

あやめ刈り君は沼にぞまどひける我は野にいでて狩るぞわびしき

とて、籬をなむやりける。

(伊勢物語 飾り粽)

(27) おなじ人(藤原忠文の息子)に、監の命婦、山ももをやりたりければ、(大和物語 やまもも)

(28) 日高う大殿籠り起きて、文やりたまふに、書くべき言葉も例ならねば、筆うち置きつつさび

るたまへり。をかしき絵などをやりたまふ。

(源氏物語 若紫)

(28)であれば「をかしき絵」の所有権が源氏から若紫へ移ると考えて良いと思われる。したがって、現代語授受動詞のヤルと用法は変わらないのではないだろうか。「人を場所にヤル」場合には派遣すること、「物を人にヤル」場合には授与、「物を場所にヤル」「車をヤル」場合には単なる移動をそれぞれ表し、ヤルのとる補語によってその意味が決まるものと考えることができる。

ヤルには①人や物の移動、②方向の視点があった。それが補助動詞になったとき、なぜ恩恵表現になったのであろうか。

ここで、本動詞と補助動詞としてのヤルの意味の変遷を見てみよう。次表は豊田圭子(2012)にテヤルと用例を付加したものである。

(表5) 本動詞と補助動詞の史的推移

時代	作品\原文	本動詞						本動詞テヤル			補助動詞テヤル					
		人ヲ場所へヤル	物ヲ(場所ニ・ガリ)ヤル	物ヲ人ニ・ヘヤル	心・思ヒ(ヲ)ヤル	水・漕などヲヤル	車ヲ(場所ニ・ヘ)ヤル	物事ヲヤル	人・動物ヲ場所ニテヤル	物ヲ人ニテヤル	水ヲテヤル	I' 抽象物+Vテヤル	I. 相手ニテヤル(プラス)	II. 相手ニテヤル(マイナス)	III. Vテヤル(相手不要)	IV. Vテヤル(マイナス)
上代	万葉集	我が誓子を大和へ通ると	濡れ衣を家にほ漕らな	手巻の玉を家づとに 妹に通らむ	酒飲みて 心を通るに				息づく君を率 授て通らさぬ	白玉を包みて 通らば						
中古	伊勢物語			懇懇しける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて	<b>移動をあらわす</b>				例の男、女にかほりてよみてやらす							
	源氏物語			をばのもとへ文やる					さるべき受置あらば、知らず能にて、くれてやらむと							
	大和物語	京に男をやりて		おなじ人に、監の命婦、由ももやりたりければ、			この車をやらせつ		(兼を) もとめてやりけり							
	枕草子	侍どもをやりて		兼を、人のもとにやりたるに			かならずまべき人のもとに、車をやりて待つに		これが本、付けてやらむ							
	源氏物語			かしき絵などをやりたまふ	おのがしし心やりて		この車を、向ひの山の面なる原にやりて		<b>移動用法</b>							
今昔物語集	下僧一人ヲ愛宕裏ニ遣ル	飯ヲ通テ水ヲ流テ行フニ	梅ニ朝人ノ許ニ、念珠掛給ナドヲ遣タリケレバ													
中世前期	機札門院石京大夫集				心やりたる」など				ただ見ましたらばなを、一枝逸みてやりたしに							
	宇治拾遺物語	下人を、むな車を借りにやりて		思のままにわたくしの人にもやりなとして					船頭が玉を、このせうずに持たせてやりける程に							
	沙石集								大口を脱ぎてやりける							
中世後期	史記抄	茶カラ聞へ使ナントヲヤリテ			正義ノ心ハ北狄ヘヤリテ中國之風俗ニシナイタト云フ		理ヲカラハ、イキハセウスレトモ、穩ニハナイツ		蕭トハ不足ノモノニハ有餘ヲ取テヤルツ	兩決シテ水ノイカタヲヨクミチヒイテヤルツ						
	毛詩抄			其賃に粟をやつたぞ		車をやる程に	番かへをやつて		水をせきとめうとも、決してやらうとも、ま・ちやぞ		あちへうらかたもよいと云うてやろぞ					
	玉塵抄	フカイをやりて		シルシに玉をヤルぞ	心をやって	車をやりて		兼に書や紙などを云給付てやられたれば								
	エソボのハプラス		田島へ通らるれば	鎧にやろうすと・(鎧前を) 運にもやらぬものを				人々も大まに笑うて散りてやれば			不審を聞いてやり	<b>物事進行用法</b>				
	天草版平家物語	部等をやつたれば					河原に車をやりとめ	大手、勝手に分けてやられた								
近世前期	夜明本狂言	おのへへ人をやつたれば		刀をやる								鎌をとふらふでやらふぞ	(どろを) かけてやらう			
	狸屋物語											君の肩をおしてやるべしと				
近世中期	好色一代女			大夫の人に物やるも								わらん七摺の鎌をまんてやれば				
	狂言 記外五十番	(男を) どちらもやらぬ		此寺そなたへやる								拙れを回してやらふ程に、女房を呼ぶでやらふか	此者をぬいてやらふ・貸さずは誰もおのれも射殺してやらふ・踏み殺してやらふもの			
	樋口初売賀											(いたちを) ころしてやらう				
	蘆子方言											(地の門の御客様を) 大まにふり付けてやりんした				
近世後期	東海道中膝栗毛	かのおやちをさきへやり	(しびんを) となりへそつとやつておく					ぜに八文出したと、帳にしるし出て行				道をきくからおしへてやるのには	ほひかけてやらうと・まっさかさまに、おつことしてやらう	きつと出かしてやる・酒でも呑でやらふ		
	浮世風呂	おめへの所へ人をやつたら、		小おけ四ツ五ツの湯をどとうにやる								背中をひつてやつてやらうから	思ふさま鳴品を打てやらうな			
近代明治期	坊っちゃん	東京へでも遊びにやつて		宿屋へ茶代を五円やつた											辞職してやる	
	北原白秋詩集 思ひ出														死んでやらうと	

表5は、テヤルが本動詞ヤルのどの用法から生じたのかを見るため、本動詞の中世後期に生じた用法「主体の思い通りに物事を進める」意までを示した。

つまり、1500年代より少し前に、本動詞に「思い通りにおし進める」意の例がある。この直後に補助動詞テヤルの移動の意味の薄まりが生じているのである。

近世の例では助動詞を伴って主体の意志が表わされているものも多くなる。本動詞のヤルに「主体の思い通りに物事をおしすすめる」意があったことから、テヤルも中立的な物事を述べるのではなく、「主体の思い通りに動作をおしすすめる」という意味を持っており、意志の用法が生じたのであろう。

以上のように見てみると、補助動詞テヤルは「主体の思い通りに物事を進める」というヤルの本動詞の用法から生じたものと考えられるのではないかと。「主体の思い通りに前項動詞の動作をすすめる」ことを表すようになり、動作の相手にとって利益があれば恩恵、不利益なものであれば非恩恵ということがテヤルによって示されるのである。

補助動詞テヤルが相手に直接影響が及ぶ動作であるⅠの用法を最初に成立させたのも本動詞ヤルの影響があるからである。

さらに、Ⅰの用法の例のなかには「しなくてもいいことをわざわざする」例が見られる。

(29) 長「新道の八百屋から猫を貰つて来た(略)短「待つしよ。ドレおれが猫の号親になつてやらう。  
(浮世床 初編巻之中1813)

これは、補助動詞テヤルが「主体の思い通りに物事をすすめる」意であることから、「相手の都合を考慮せずに、主体の思う通りにふるまう」ことも表わすためであると考えられる。

Ⅲ以降は、相手に動作が直接及ばないものになる。Ⅲ・Ⅳの用法、近代以降みられる無意志的な自動詞についてその動作を意志化する用法が生じたことについても、補助動詞テヤルに元々含まれていた「主体の思い通りに動作をすすめる」意を有していたためであると思われる。

## 7. おわりに

本稿ではテヤルの変遷から、その用法をⅠからⅣに分け、考察した。ⅠからⅣを再度示すと以下のようになる。

Ⅰ Vの動作が相手に直接に及ぶことを表わす。結果的に恩恵になる場合である。(中世室町後期～)

Ⅱ Vの動作が相手に直接に及ぶことを表わす。結果的に非恩恵になる場合である。(1600年代～)

Ⅲ Vの動作が相手に直接に影響せず、主体が一人で行う動作であり、決意表明を表わす。(1800年代～)

Ⅳ Vの動作が相手に直接に影響せず、主体が一人で一般的に好ましくない動作を行うことを表わす。(1900年代～)

ⅠとⅡが相手を必要とする(動作が相手に直接に及ぶ)ことに対し、ⅢとⅣは相手が不要(動作が相手に直接に及ばない)である。

以上より、先行研究において指摘されている「動作が強い意志を持って行われることを表わす」「話し手の積極的な態度を表わす」とされるのは、ヤルの本動詞の意味変化から生じたと結論できる。

現代語のテヤルはテクレル、テモラウなどとともに補助動詞の授受動詞の体系に組み込まれている。現代語の授受動詞は近世前期上方語にはすべて出さろうという。ヤル・クレル（クルル）・モラウおよび、テヤル・テクレル・テモラウなどがそれぞれ補助動詞として成立し、徐々にその体系をなしていったのだろう。

### 【参考文献】

- 荻野千砂子（2007）「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』第3巻3号  
荻野千砂子（2008）「近世前期のテヤル－現代語のベネファクティブとの比較－」『中村学園大学短期大学部研究紀要』第40号  
影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房  
金澤裕之（2009）「虎明本狂言集に見る「テ+補助動詞」による授受表現の成立過程」『国語国文』第78巻1号  
金水敏（1989）「敬語優位から人称性優位へ－国語史の一潮流－」『女子大文学国文篇』第40号  
久野暉（1978）『談話の文法』大修館書店  
グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型事典』くろしお出版  
古川俊雄（1995）「授受動詞「くれる」「やる」の史的変遷」『広島大学教育学部紀要 第二部』第44号  
小島聡子（2002）「古典語のテ型の一用例－「～てやる」－」『明海日本語』第7号  
近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房  
高橋太郎（1994）『動詞の研究－動詞の動詞らしさの発展と消失－』むぎ書房  
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版  
豊田圭子（1974）「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』第1号  
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房  
日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』くろしお出版  
日高水穂（2007）『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房  
豊田圭子（2012）「動詞「ヤル」の意味・用法の変遷」『日本語学会2012年度秋季大会予稿集』日本語学会

### 【使用した資料】

- 『萬葉集①～④』新編日本古典文学全集6 1994-1996年 小学館、『日本書紀①～③』新編日本古典文学全集2 1994-1998年 小学館、『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文学全集12 1994年 小学館、『落窪物語 堤中納言物語』新編日本古典文学全集17 2000年 小学館、『源氏物語』新日本古典文学大系19-23 1993-1997年 岩波書店、『枕草子』新潮日本古典文学集成11-12 1977年 新潮社、『宇治拾遺物語』日本古典文学全集28 1973年 小学館、『沙石集』新編日本古典文学全集52 2001年 小学館、『史記桃源抄の研究』（本文篇一・二）亀井孝・水沢利忠著 1965-1967年 日本学術振興会、『毛詩抄 詩経』（一）（二）倉石武四郎 小川環樹校訂 1996年 岩波書店、『毛詩抄 詩経』（三）（四）小川環樹 木田章義校訂 1996年 岩波書店、『天草版平家物語 対照本文及び総索引 本文篇』江口正弘 1986年 明治書院、『エソポのハプラス 本文と総索引 本文篇』大塚光信・来田隆編 1999年 清文堂、『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇』上中下 池田廣司・北原保雄編 1972-1983年 表現社、『狂言記』新日本古典文学大系58 1996年 岩波書店、『井原西鶴集①』新編日本古典文学全集66 1996年 小学館、『近松浄瑠璃集 上下』新日本古典文学大系91-92 1993-1995年 岩波書店、『東海道中膝栗毛』新編日本古典文学全集81 1995年 小学館、『洒落本 滑稽本 人情本』新編日本古典文学全集80 2000年 小学館、『東海道四谷怪談』新潮日本古典集成45 1981年 新潮社、『新本大系』巻1-7 武藤禎夫・岡雅彦編 1975-1976年 東京堂出版、『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』1995年 新潮社、『CD-ROM版 新潮文庫 大正の文豪』1997年 新潮社、『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』1997年 新潮社

**【参考辞書】**

小学館国語辞典編集部 (2002) 『日本国語大辞典 第二版』 小学館

北原保雄編 (2003) 『明鏡国語辞典 携帯版』 大修館書店

山田忠雄編 (2012) 『新明解国語辞典 第七版 小型版』 三省堂